

【研究報告】

在日韓国・朝鮮人認知症高齢者家族の介護ストレスの背景

森 田 深 雪*

【要 旨】

本研究の目的は、在日韓国・朝鮮人（以下、在日）認知症高齢者の家族介護者がかかえるストレスの背景を明らかにすることである。在日認知症高齢者の家族介護者6人に半構成的面接を実施し、得られたデータについて記述的探索的に分析を行なった。その結果、在日認知症高齢者の家族介護者がかかえるストレスは【出口の見えない嫁・姑の家族関係】の中で【家父長的支配と忍従】を強いられながら、【在日の閉鎖的生活環境】での介護であること、そして【異文化ケアへの配慮のなさ】や【在日ゆえの介護保険サービスの利用しにくさ】が【朝鮮民族女性としてのプライドと、「在日」として生きる現実との葛藤】に関連してストレスを増大させていた。また、【介護に対する否定的認知】や【仕事と介護の両立】も介護ストレスの背景となっていた。

【キーワード】 在日韓国・朝鮮人、認知症、介護ストレス

I はじめに

政令指定都市のA市における韓国・朝鮮人の外国人登録者数は、2010年3月末現在6,588人で、A市の外国人登録者数の40.0%を占める（法務省入国管理局統計及び広島県企画総務局2010年版）。A市の在日韓国・朝鮮人（以下「在日」と省略する）高齢者むけのデイ・サービスは現在2ヶ所あり、昔ながらの食事、歌や踊り、旧友との交流の体験が、苦労だらけの人生を生き抜き「老い」を迎えた在日高齢者の生きがいのひとつとなっている。在日要支援・要介護高齢者は、言葉の問題・生活習慣の違い・スタッフや他の入所者との関係作りが困難等の理由により、あるいは在日女性高齢者の特徴として、儒教的家族観や韓国・朝鮮人女性としての生き方へのこだわりがあり、日本人利用者が多い介護保険施設はほとんど利用されない。在日高齢者が認知症になると、かつては日本語を話していても母国語しか話すことができなくなり、さらに重度化すると、母国語すら話すことができなくなる。一方在日2・3世の同居世帯では家庭内において認知症の1世が話す母国語は在日2・3世には理解しにくい。老後を子に看て貰うのは当然という家族観を持つ在日1世であるうえに、認知症によるコミュニケーションの難しさや世代間の価値観のズレを抱えながらの在宅介護

は、介護者・被介護者ともどもストレスを抱えると推測する。

在日高齢者の介護問題に対する先行研究は数としては少ないが、在日高齢者の年金問題や、言語や食文化を中心とする異文化共生の課題について提示されたことをきっかけに（庄谷，中山，1997；嵯峨，2003；李2007.），在日高齢者自身の介護ニーズや精神的健康課題（平野，2008；文，2009），異文化間における施設内介護のあり方（金，2008）や介護保険制度の活用に関わる問題と民族意識の存在もあきらかにされ始めた（趙，2009）。また行政支援に関する研究として、三重県の在日外国人をめぐる保健医療サービスのあり方について、保健活動の領域はまだ母子・小児保健が中心であるが、今後在住外国人の高齢化を視野に入れ、地域に住む外国人の文化的背景についての知識を深めること、文化を考慮したケアの実践への研修の必要性を指摘している（橋本，深堀，伊藤，馬場，山路，佐々木，村嶋，2010）。しかし、日本社会で生まれ育ってきた在日2・3世による在日の認知症高齢者介護の実態や思いについて明らかにされた研究は現在のところ見当たらない。在日社会の中では、介護者自身が親の介護負担を家族以外の人間に語ることをタブー視している人は少なくない。本研究により在日認知症高齢者の家

* 日本赤十字広島看護大学 地域看護学 非常勤講師 bachmiyuki@kjc.biglobe.ne.jp

族の介護ストレスの背景を明らかにすることは、今後避けては通れない在住外国人高齢者を対象とする地域保健活動において、家族支援や地域ケアを検討する上で示唆を得られると考える。

Ⅱ 用語の操作上の定義

在日韓国・朝鮮人：日本において「韓国」もしくは「朝鮮」国籍を有し、外国人登録をしている人のことをいう。

認知症：本研究では、アルツハイマー病、脳梗塞、脳出血、脳動脈硬化などのためにおこる脳血管性認知症で、記憶障害、見当識障害、理解・判断力の低下、実行機能の低下などの中核症状を呈しているレベルとした。

介護ストレス：本研究では、介護を行なうことにより心理・社会的要素の強いストレスが関与する心理的ストレスと、身体的負荷がストレスとして引き起こされる身体的ストレスの両方のストレスによって感じる不安・焦燥・抑うつなどの情動的反応、集中力低下、記憶障害、知覚障害などの認知的反応、そして飲酒、過食、喫煙などの行動的反応、循環器、消化器、自律神経、内分泌などの反応形態を生じる状態とした。

Ⅲ 研究目的及び研究方法

1. 研究の目的と方法

研究目的は、在日韓国・朝鮮人認知症高齢者家族の介護ストレスの背景を明らかにすることとした。研究方法は、在日韓国・朝鮮人家族介護者がもつ認知症介護に対する認識や、その社会的事象を解釈していくため、複数の個人面接による記述的探索的研究方法を選択した。

2. 研究協力者

在日認知症高齢者を在宅において3年以上介護しており、日々の体験を日本語で言語化できる家族介護者女性6人を研究協力者とした。研究協力者の概要は表1に示す。年齢は5人が50～60歳代で、1人のみが30歳代で被介護者とは「孫」という続柄である。本研究の目的は続柄や民族による介護ストレスの比較ではなく、社会的・文化的背景が日本人とは異なる「在日」の介護ストレスの背景を明らかにするということから、協力者の中に組み入れた。被介護者は全員が女性、78歳～90歳までの在日1世で、デイ・サービスを利用する。それ以外のサービスについては被介護者が認知症レベルⅢaで訪問入浴、Ⅲbで訪問介護である。1人だけがショートステイを利用していた。

3. データの収集方法・手順

- ① データ収集期間は2010年8月～11月である。
- ② 面接は研究協力者の自宅あるいは希望する場所を優先し、事前にICレコーダーへの録音の了承を得た。面接は1人60分程度で1～2回行った。
- ③ インタビューガイドに沿って半構成的個人面接法により面接した。インタビュー内容は、サービスを受けるまでの介護ストレスの内容・介護ストレスを感じたときの対処方法・相談相手の有無・介護保険サービスを利用するにあたっての思いなどである。

4. データの分析方法

- ① インタビュー後、逐語録を作成し要約をした。
- ② 個々の文脈から介護ストレスに関する内容を抽出し、協力者の表現をできる限り使用してコード化した。さらに一貫した意味を探し出しサ

表1 研究協力者の概要

	A	B	C	D	E	F
介護者の年齢	52	56	65	57	36	58
生活形態	同居	同居	同居	同居	別居	同居
被介護者との続柄	長男の嫁	長男の嫁	長女	長男の嫁	長女の孫	長男の嫁
被介護者の状況	被介護者の性別	女性	女性	女性	女性	女性
	被介護者の年齢	90	80	88	78	86
	オムツ使用	有	無	有	無	無
	認知症レベル	Ⅲa	Ⅲa	Ⅱa	Ⅲb	I
	介護保険要介護度	5	3	3	1	1
	デイ・サービス利用回数（1週につき）	4	3	3	4	2
	その他サービス	ショートステイ	—	訪問入浴	—	—
						訪問介護

ブカテゴリーとして仮テーマをつけた。

- ③ 協力者個々のサブカテゴリー化したテキストを、生データに立ち返りながら統合した。
- ④ 中心的意味が類似しているサブカテゴリーを統合し、「介護ストレスの背景」のカテゴリーとした。分析に関しては、質的研究の指導経験者と検討を行い、分析の真実性、明晰性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

協力者に対しては、協力者及びその被介護者の通称名・本名を確認しておき、署名や押印を拒否された場合は協力者の要望を優先した。また被介護者及び協力者の体調を最優先するなどの配慮をした。本研究は日本赤十字広島看護大学倫理審査の承認を受けて実施した。

IV 結 果

在日認知症高齢者の家族介護者が日々の介護生活で感じるストレスや、介護保険サービスへの思いなどの語りを分析した結果は、表2のとおりである。

【出口の見えない嫁・姑の関係】【家父長的支配と忍従】【在日の閉鎖的生活環境】【朝鮮民族女性としてのプライドと、「在日」として生きる現実との葛藤】【異文化ケアへの配慮のなさ】【介護保険サービスの利用しにくさ】【介護に対する否定的認知】【仕事と介護の両立】という8つのカテゴリーが見出された。以下これらの内容について記述していく。文中表記について、在日韓国・朝鮮人認知症高齢者の家族の介護ストレス構造のカテゴリーは【 】, サブカテゴリーは『 』, それを構成するコードは〈 〉で示す。またこれらを分析するにあたって根拠となった生データ及びその意味を示すときは「斜体」で表記した。方言については、語りの内容の意味が損なわれないようにしながら修正した。() 内のアルファベットは語り手を表す。

1 【出口の見えない嫁・姑の関係】

【出口の見えない嫁・姑の関係】は、『嫁・姑関係そのものがストレス』『何年たっても築けない、いい関係』から構成される介護ストレスである。

協力者が、「姑がいないと、息が吸える感じがす

表2 在日韓国・朝鮮人認知症高齢者家族の介護ストレスの背景

カテゴリー	サブカテゴリー
出口の見えない嫁・姑の家族関係	嫁・姑関係そのものがストレス
	何年たっても築けない、いい関係
家父長的支配と忍従	夫や年長者への絶対的な服従
	夫の義兄弟姉妹への気苦労
	長男の嫁という重責と使命感
	身内と通所サービス中心の介護
	介護への気負い
在日の閉鎖的生活環境	話すとすぐに広まる環境
	日本で生きていながら、朝鮮人だけの閉鎖された社会
朝鮮民族女性としてのプライドと、「在日」として生きる現実との葛藤	女性は実母にも娘にも頼らないという韓国・朝鮮人の家族観
	日本で苦勞した親への尊敬と自分への自信
	在日として生きる苦悩
異文化ケアへの配慮のなさ	在日によるサービスへのこだわり
	日本語ハンディへの無理解
	異文化への無理解
介護保険サービスの利用しにくさ	質・量ともに不十分な在日のためのサービス
	介護サービス情報へのアクセスの難しさ
	生活スタイルにそぐわない一律的なサービス
	行政窓口への抵抗感
介護に対する否定的認知	初めての認知症介護体験の辛さ
	体験者にしかわからない辛さ
	途切れることなく家族のために尽くす生活
	開き直るまでの葛藤
仕事と介護の両立	介護と仕事を両立せざるを得ない生活

る（A・D）」「自分の家なのにいつまでたっても気が休まらない（B）」と語るように、介護者・被介護者の関係性よりも、《他人同士の息苦しさ》《気が休まらない同居生活》《実母と姑への気持ちの絶対的温度差》という『嫁・姑関係そのものがストレス』であり、どんなに協力者が頑張っても《嫁はいつまでたってもよそ者》であり《何年一緒に暮らしても縮まらない距離感》を持っていた。

2【家父長的支配と忍従】

【家父長的支配と忍従】とは、『夫や年長者への絶対的な服従』『介護への気負』『身内と通所サービス中心の介護』『長男の嫁という重責と使命感』『夫の義兄弟姉妹への気苦労』で構成される介護ストレスである。

協力者は、「デイ・サービスの出迎えの時には必ずその場にいないといけないんよ（C）」というように、《姑（母親）を一番大事にする習慣に左右された生活》を強いられていた。介護についての《夫の決定権を優先》することは、（嫁である自分が責任を取らないで済むようにしておく）という自己防衛的側面もあるが、『夫や年長者への絶対的な服従』を強いられていた。そして協力者たちは《できることは精一杯という気負い》《介護の責任を一人で背負い込む覚悟》《いい嫁だといわれたい気持ち》《介護の愚痴は親戚にも友人にもこぼしたくない》といった『介護への気負』が強い。その気負いが、《認知症を進行させたくないの、ショートステイは使わない》で《デイ・サービスで乗り切る》《ヘルパー・サービスで乗り切る》《何があってもショートステイは使わない》といった介護スタイルにさせていた。そして《お金をかけて介護することを認めてくれない夫や親戚》の中で、《冠婚葬祭だけが、誰もが認める「親戚に預けられる」正当な理由》となる。よって《いざというときに預かってもらうために、親戚を大事にしておく》日常的な気遣いをしなければならない。この『身内と通所サービス中心の介護』は『長男の嫁という重責と使命感』を背景としていた。《自他共にある、介護は長男の嫁の仕事という捉え方》や《本家の嫁という立場をいつも気にしなければならない》《自分の他に介護を代わられる者がいない》状況で、いつのまにか《打算的に長男の嫁の責務を果たす》だけになっている協力者もいた。《金や口は出しても誰も介護責任をとってはくれない》家族や、《介護サービス利用を義兄弟姉妹に理解してもらう苦労》は『夫の義兄弟姉妹への気苦労』への不満をつのらせる要因となっていた。

3【在日の閉鎖的生活環境】

【在日の閉鎖的生活環境】は、『話すとすぐに広まる環境』『日本で生きていながら、朝鮮人だけの閉鎖された社会』で構成される介護ストレスである。

協力者全員が「朝鮮人の世界は狭すぎる（A）」「友達にも絶対に介護の愚痴はこぼせない（F）」というように《在日はみな知り合いみたいなもの》で、《介護の愚痴も悩みも話したらすぐに広まる》在日の生活環境であった。《日本人との付き合いがまったくない》社会環境で生きる協力者もあり、《自分は日本にいながら、朝鮮の世界で生きているような感覚》は『日本で生きていながら、朝鮮人だけの閉鎖された社会』といえる。

4【朝鮮民族女性としてのプライドと、「在日」として生きる現実との葛藤】

【朝鮮民族女性としてのプライドと、「在日」として生きる現実との葛藤】は、『女性の実母にも娘にも頼らないという韓国・朝鮮人の家族観』『日本で苦労した親への尊敬と自分への自信』『在日として生きる苦悩』を背景とする介護ストレスである。

協力者たちは「朝鮮人の女は親にも娘にも頼らんよ（C）」「娘はね、実の親の介護はできんのよ（F）」という言葉にあるように、実家の親にも、嫁がせた娘にも頼らず介護をやりきろうとしていた。《嫁がせた娘には頼らない》生き方は『女性の実母にも娘にも頼らないという韓国・朝鮮人の家族観』であり、儒教的家族観に強く影響を受けていた。また《家の中のことは完璧にやり遂げたい習慣》をもち、《母親から教えられた、痛みを我慢して頑張る生き方》《母親から受け継いだ、過ぎたことや愚痴を言わない生き方》《父親から受け継いだ、したたかな生き方》《父親から引き継いだ、日本人にも韓国人にも裏切られてきた在日の思い》を継承しながら、『日本で苦労した親への尊敬と自分への自信』をもっていた。しかしその一方で「どう思ってみても、私は在日なんよ（A）」と、自分自身について《どんなにあがいても日本も韓国も両方捨てることができない運命》を感じながら『在日として生きる苦悩』も抱えていた。

5【異文化ケアへの配慮のなさ】

【異文化ケアへの配慮のなさ】は『在日によるサービスへのこだわり』『日本語ハンディへの無理解』『異文化への無理解』を背景とする介護ストレスである。

「在日のサービスだから利用するんよ。でなかったら使わんよ。（B）」と言われるように、被介護者のみならず協力者も《気心が知れている在日の施設

だからこそ利用する」という『在日によるサービスへのこだわり』があった。また医療機関に入院した際に被介護者の《日本語へのハンディが認知症を進行させた》経験や《日本語が話せなくても簡単な意思表示はできるのだから、ショートステイを受け入れて欲しい》《在日高齢者に対して、日本人の方が、朝鮮語を使う努力をしてほしい》キムチやにんにくを使った《民族的な食習慣に理解を示して欲しい》などのニーズは、ケアスタッフ側の『日本語ハンディへの無理解』『異文化への無理解』を背景にして引き起こされた介護ストレスである。

6 【介護保険サービスの利用しにくさ】

【介護保険サービスの利用しにくさ】は『質・量ともに不十分な在日のためのサービス』『介護サービス情報へのアクセスの難しさ』『生活スタイルにそぐわない一律的なサービス』『行政窓口への抵抗感』を背景とする介護ストレスである。

協力者は「預かってもらうのに文句は言えない。でもね、食事やら日本語がわからんからといって何度も呼び出されたんじゃあ、預けた意味がないよ(A)」という語りにみられるような体験をしていた。《在日のショートステイがないことから生じる不便さ》《使いたいときに使えない日本のショートステイ》《入浴サービスのない在日のデイ・サービスの不便さ》《認知症が進行しなければ、日本人と一緒にのデイ・サービスが使えない理不尽さ》《独居老人の食事は在日同士の助け合いで賄う》というサービスの質・量の不足から生じる不便さを感じると同時に、《在日は利用者も支援者も、双方が介護保険制度について理解不足である》ことも認識していた。《広報の存在を知らなかった》協力者の存在、《新聞をとらないので、文字による情報が不足している》と感じても、「自分達朝鮮人は、人から聞いて初めて知ることばかりよ(E)」というように、教えてもらうことへの抵抗感を持っていた。《テレビで介護のドラマを見て、介護保険サービスを知る》ことが多い協力者たちは全員が《在日を対象とした介護保険制度の説明会をしてほしかった》と希望していた。これは、「サービスを知っていたら、在日の女は生きる道ができていたはず(C)」という語りに象徴される。また、飲食業経営の協力者は夕方から夜間にかけての仕事が多く、朝からのデイ・サービスでは、家族の生活サイクルとあわない。《利用者や家族が、デイ・サービスの時間に合わせた生活を強いられている》ことや、認知症の被介護者がエレベーターや階段などの《マンションなど、住宅環境を配慮したサービスがない》ために、ゴミ

だしのことで隣近所の日本人とのトラブルが絶えないことなどのストレスをかかえていた。朝鮮人は《いつも日本人に何かを教えてもらう立場である》と感じ、《在日が区役所への抵抗感と恐怖感をもっていることを日本人は知らない》という思いは『行政窓口への抵抗感』となり、介護保険サービスへのアクセスを遠ざけていた。

7 【介護に対する否定的認知】

【介護に対する否定的認知】は『初めての認知症介護体験の辛さ』『体験者にしかわからない辛さ』『途切れることなく家族のために尽くす』『開き直るまでの葛藤』で構成される介護ストレスである。

協力者たちは、排泄介助や物とられ妄想、夜間せん妄などによる睡眠不足や慢性的疲労感など《初めて体験する認知症周辺症状の受け入れがたさと苦痛》を訴えていた。また認知症の進行により《在日1世の味覚や食習慣へのこだわりに併せることの大変さ》や《日本語が話せなくなったことによるコミュニケーション困難》は《介護を誰にも代わって貰えない心身の慢性的疲労感》《介護の重度化・長期化への将来的悲観》と重なっていた。《介護は辛い》という本音を《友人にも、子どもにも、介護の愚痴はこぼさない》が《介護体験者同士なら分かり合えるかもしれない》とも思っていた。協力者は「介護し始めて8年も経つ。ずーっと家族のために生きていくようなものよ(B)」という語りのように《子育てが終ったと思ったら、次は介護》が待っており、《自分のための時間を持ったことがない》生活を送ってきた。自分自身の人生をふり返り『途切れることなく家族のために尽くす人生』だと認識していた。介護にあげくれる自分を《はじめは優しくできたが、今は義務感しかない自分》のように感じ《開き直らないと自分がつぶれる》という思いで、《自分にできることの限界をわきまえる》《サービスを上手く使って自分を守る》というストレス対処をする協力者もいた。

8 【仕事と介護の両立】

【仕事と介護の両立】とは、被介護者が無年金で収入がない場合、その子ども達にとって《介護費用支払いと子どもの教育費とが重なることによる経済的負担》と、それでも《介護しながらでも働き続けなければ生きていけない経済的苦しさ》を抱えていた。それは『介護と仕事を両立せざるを得ない生活』以外に選択肢がないことによるストレスであった。

V 考 察

1 在日認知症高齢者家族介護者に特徴的なストレス

本研究協力者に特徴的な介護ストレスの背景として、儒教的家族観に影響を受けた家族関係、在日がおかれてきた閉鎖的な社会環境、文化・民族意識が考えられた。たとえ、親・夫や年長者を大事にしなければならぬという儒教的家族観に強く影響を受けている在日といえども、嫁・姑関係は、「介護者－要介護者関係」となる以前の続柄である。その続柄を根底とした家族の歴史に根ざした葛藤が介護ストレスを増幅させていると考える。また、儒教的家族観による社会的規範を当然とする在日1世要介護者と対峙しながら配偶者やその兄弟姉妹への気苦労も重なり、極力在宅サービスのみで乗り切ることが要求される身内全体の介護意向に従わざるを得ない状態が明らかになった。それは、儒教的家族観という重い鎖を足かせにされて【家父長的支配と忍従】を強いられている在日の嫁・介護者の姿である。介護保険制度が浸透してきたとはいえ、日本の老親介護を支えてきた同居の子や子の配偶者による老親扶養義務感がまだまだ薄れてはいないのと同じように、儒教がいかに在日女性介護者の生き方を規定してきたかがえる。また、在日1世のほとんどが、若い頃の就労形態の特徴として職場とともに居住地を転々としている。それゆえに、「家」への執着は強いものがあり、在日要介護高齢者自身は家族介護志向が強く、施設サービスよりも在宅サービス利用の意向が高い（李，2007）。このことが一層、身内と通所サービス中心の介護スタイルを余儀なくさせ、介護者のストレスを高めていると考える。

在日1世が、差別と貧困の中でお互いに情報交換しながら団結・協力し合わなければ生きることが困難であった歴史的経緯を無視することはできない。「同胞社会」といわれるように、日本人とのつきあいは近所づきあい程度しかなく、介護の愚痴をこぼすとすぐに広まってしまう【在日の閉鎖的生活環境】の中で生活している。これは、【介護保険サービス情報へのアクセスの難しさ】と連鎖していく。厚生労働省は2000年の介護保険制度施行以来「認知症を知り地域をつくる10ヵ年構想」により、介護人材の育成と拡充、地域包括ケアシステムの導入により地域支援の展開、地域医療・専門医療の充実を推進している。しかし同じ日本に生きながら、在日認知症高齢者の介護家族は、国や県の打ち出す施策とはおおよそかけ離れたところで介護負担を感じているのが実態ではないだろうか。在日独自の情報阻害の実態と、長年の在日への差別と抑圧の歴史によって植

えつけられてきた行政窓口や医療福祉サービスへの不信とがあいまって、介護保険サービスを利用しづらい状況をつくっている。在日のおかれている介護環境は、地域ぐるみの介護支援でもなく、民族ぐるみの介護支援でもない。まさしく「孤立」環境によるストレスである。

協力者は儒教的家族観に縛られることにストレスを感じながらも、それぞれの直系父母、特に母親の忍耐強さを尊敬し、自らの生き方のモデルとしていた。それは、単なる「母親像」ではなく、「在日」として苦勞しながら生きてきた「朝鮮民族女性」というモデルであるが、実は協力者は、このモデルに肯定・否定両方の感情を持っていると考える。苦勞だらけの人生を送ってきた1世に理解を示しつつも、協力者自らが選択したわけではない「在日」に対する被差別感や不合理性、つまり日本社会での介護における【異文化ケアへの配慮のなさ】や【介護保険サービスの利用しにくさ】への不満と怒りである。ゆえに、【朝鮮民族としてのプライドと「在日」として生きる現実との葛藤】が生まれる。被介護者が日本語を忘れてしまうことによるコミュニケーション困難や、在日1世の味覚や食習慣へのこだわりに合わせてることの大変さといった、在日認知症高齢者介護の独自の課題も浮かび上がってきた。介護をやりきる自己効力感がありながらも、現実には自分の思い通りにいかない【介護に対する否定的認知】へのストレスが増大していると考えられる。

2 在日韓国・朝鮮人認知症高齢者家族介護者への支援の方向性と課題

在日認知症高齢者家族の介護者がかかえるストレス軽減のためには、まず認知症介護の肯定感に結びつく支援が必要である。在日介護者を民族内で、そして地域で孤立させない取り組みの実践、インフォーマルも含めた社会資源に関する情報提供のありかたへの配慮と工夫が必要と思われる。

本研究結果からも、医療機関や日本人利用者ばかりの介護施設での【異文化ケアへの配慮のなさ】が、認知症高齢者にとって大きなリスク要因となり、介護家族の負担を増大させていた。保健医療従事者側の多文化共生への理解とコミュニケーション能力の研修が求められる。また在日1世の母国語が理解できないことによる2・3世家族介護者のストレス軽減と、狭い在日社会の中で介護者家族の会を組織化するには多くの課題があることが推測される。在日社会において、まずサービス利用することや介護負担を他者に語ることの垣根を低くしていく取り組みからスタートしていかなければならない。公衆衛生

看護に携わる専門職は、地域へ出向き、生活しづらさや生きづらさを抱える人々を見過ごすことなく、いろいろな立場の人間と交じり合い、地域ケアのつなぎ手になることが望まれる。

VII 結 語

本研究は、在日韓国・朝鮮人認知症高齢者家族の介護ストレスの背景を明らかにするために、在日認知症高齢者の家族介護者を対象に半構成的面接を行い、記述的探索的に分析を行なった。その結果、在日認知症高齢者家族の介護者がかかえるストレスは【出口の見えない嫁・姑の家族関係】の中で【家父長的支配と忍従】を強いられながら、【在日の閉鎖的生活環境】での介護であること、そして【異文化ケアへの配慮のなさ】や【在日ゆえの介護保険サービスの利用しにくさ】が【朝鮮民族女性としてのプライドと、「在日」として生きる現実との葛藤】に関連してストレスを増大させていた。また、【介護に対する否定的認知】や【仕事と介護の両立】も介護ストレスの背景となっていた。

今後の課題

本研究では協力者が6人と少なかったことから、ここで明らかになった結果や分析を一般化することはできない。外国人登録が出入国管理政策を目的としたものであるため、調査の困難さからすると民族団体組織や介護保険サービス事業者の協力を得ながら、より多くの在日認知症高齢者の介護者について研究を行なうことにより、介護ストレスの実態と背景を明らかにすることが必要であると考えている。

謝 辞

本研究は平成22年度日本赤十字広島看護大学奨励研究費助成を受けて行ないました。本研究に快くご協力をいただきました在日韓国・朝鮮人介護者の皆様、介護保険事業所の職員の皆様に心より感謝申し上げます。

文 献

橋本秀実，深堀浩樹，伊藤 薫，馬場雄司，山路由

美子，佐々木由香，村嶋正幸（2010）．三重県保健師の在日外国人への保健活動．三重県立看護大学紀要，14，19－26．

平野裕子（2003）．在日外国人の身体的・精神的健康－保健学・看護学的視点から－．福岡医学雑誌，94（8），241－249．

広島市統計．2010年版．広島市企画総務局企画調整部調整担当．

法務省入国管理局外国人登録者統計．2009年度．

金 春男，黒田研二（2007）．異文化に配慮した認知症高齢者の生活支援について．老年社会学，29（2），229．

木立り子（2004）．嫁介護者の語りからみた社会的規範意識と介護継続の条件．日本看護研究学会雑誌，27（1），73－81．

森田深雪，飯村富子（2009）．在日韓国・朝鮮人女性高齢者が日本社会で迎える「老い」の意味．日本老年看護学会第14回学術集会抄録集，99．

文 鐘聲（2009）．在日コリアン高齢者の認知症と言語に関する検討．大成学院大学紀要，11，119－126．

小澤芳子（2005）．家族介護者の続柄別にみた介護評価の研究．日本認知症ケア学会誌，5（1）27－34．

李 錦純（2007）．在日コリアン高齢者の介護保険サービス利用意向に関連する要因の分析．国際保健医療，22（2），99－105．

嵯峨嘉子（2005）．在日コリアン高齢者の経済状況と生活保護制度における諸課題．大阪，社会問題研究／大阪社会事業短期大学社会事業研究会（編）．

杉山孝博（2008）．介護者支援の大切さ（地域医療の現場から見えるもの）．保健師ジャーナル，64（9），802－807．

庄谷玲子，中山 徹（1997）．高齢在日韓国・朝鮮人大阪における「在日」の生活構造と高齢福祉の課題．御茶の水書房，P315．

趙 文基（2009）．桃山学院大学社会学論集43（1），51－76．

Some background factors of stress felt by Korean residents in Japan taking care of elderly people suffering from dementia

Miyuki MORITA

Abstract:

The purpose of this study is to examine some background factors of stress among Korean residents in Japan who have to take care of elderly patients suffering from dementia. A semi-structured interview was conducted for six persons who nurse their elderly family members suffering from dementia, and then a descriptive and exploratory data analysis was made of the interview data obtained. One of the major findings was that the family members' stress seems to stem from the fact that they were taking care of their elderly persons in a closed living environment as Korean residents, being forced to follow the paternalistic control in a perpetual wife and mother-in-law relationship. Another finding was that their stress was increased by such factors as little consideration to care-giving in a different culture and unavailability of nursing-care insurance, especially having an effect on the frustration of living as a Korean resident, while maintaining pride as Korean women. In addition, behind the stress as a care-giver lie some negative recognition of nursing and incompatibility of working and nursing.

Keywords:

Korean residents in Japan, dementia, nursing care stress